論文審査要旨及び担当者

報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　志賀俊介

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　　巽　孝之　文学研究科委員、Ph.D.

副査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　　大串尚代　文学研究科委員、Ph.D.

副査　日本大学商学部教授　　牧野理英　Ph.D.

副査　オハイオ州立大学教授　　ブライアン・マクヘイル　Ph.D.

副査　立命館大学文学部国際文化学域教授　　ナサニエル・プレストン　Ph.D.

学識確認　　巽　孝之　文学研究科委員、Ph.D.

論文題目

Living in the Middle of Nowhere: Ontological Ambivalence in Jhumpa Lahiri's Works
（脱領域の文学――ジュンパ・ラヒリの作品における存在論的二律背反）

本研究は、旧来のアメリカ文学史においてはほとんど注目されることのなかったインド系移民作家の意義を確認し、その 1.5 世代に属する中産階級女性作家ジュンパ・ラヒリが描く、アメリカとインドのどちらにも根を下ろすことができない人々の存在論的二律背反が秘める文学的可能性を模索する。19 世紀の文豪ナサニエル・ホーソーン以降のロマンス小説史を踏まえつつも、そうしたキャノン的文学史観を 1960 年代以降の対抗文化史の文脈に巧みに接続してみせた、これは独創性にあふれた論文である。

主論文各章は以下のように構成されている。

Prologue
Chapter 1. Coming out of Nowhere: The Ambivalence of Realism and Unrealism in *The Namesake*
Chapter 2. Drowning in Sentimentality: The Tradition of Sympathy in "Hema and Kaushik"
Chapter 3. Re-rooting/Re-routing Travel to the Home: *The Lowland* as a Reinterpretation of *The Scarlet Letter*
Chapter 4. Displaced American Authority: *In Other Words* as a Quasi-Autobiography
Epilogue
Bibliography

論文の概要

1980 年代以降、Emory Elliott 責任編集による *Columbia Literary History of the United States* (1988) に代表されるように、1920 年代以来定説とされていた植民地時代のピューリタン文学をその端緒とし、ヨーロッパ系白人男性作家を中心に形成されたアメリカ文学史の見直しが積極的になされるようになった。それにより、ピューリタン文学の影に隠れていたネイティヴ・アメリカンによる文学に光が当てられ、アメリカ文学が潜在的にもつ人種的多様性が明らかになっただけでなく、女性作家やアヴァンギャルド作家の再発見が行われたのである。

特に、1965 年の移民国籍法（ハート＝セラー法）は、従来の国籍により移民の受け入れ数を決定する割当制度を撤廃したという点において見逃せない。以降、その数を大きく増やしたアジア系移民の中でも、当時の米ソ冷戦期の状況を考えるならばインド系移民作家の特異性は注目に値する。アメリカ政府はソヴィエトとの激しい技術開発競争を勝ち抜くため、科学分野での優秀な人材を取り込むべくインドからの移民を積極的に受け入れたからだ。

英語教育の影を色濃く残す中、インド文学は発展を遂げた。インド人作家による初の英語文学とされる *Rajmohan's Wife* (1864) をイギリス統治時代に執筆した Bankim Chandra に始まり、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞し、イギリスの詩人 W. B. Yeats も絶賛したことで知られる Rabindranath Tagore など、英語で執筆されたインド文学は宗主国であるイギリス本国の文化にも影響を及ぼした。

そして 1965 年にアメリカで新たな移民法が成立し多くのインド人が海を渡ると、その文学はアメリカの地で花開くことになった。筆頭格 Bharati Mukherjee (1940—2017)はアイオワ大学で開かれた創作ワークショップに参加するためにアメリカへ渡り、インド系移民の第一世代を代表する作家となった。そして、次の世代のインド系アメリカ人作家でアメリカ文学史上に最も影響力を及ぼしているのは Jhumpa Lahiri (1967—)である。ベンガル人の両親のもとにロンドンで生まれ、幼少期にアメリカへ渡った Lahiri は、第一世代と第二世代のどちらにも属することのない、いわゆる 1.5 世代の移民である。ピュリッツァー賞を受賞した最初の短編集 *Interpreter of Maladies* (1999) 以来、彼女の作品はアメリカ文学に衝撃を与え、大学における英文科教科書の定番と言える *The Norton Anthology of American Literature* に 2007 年の第七版以降、短編小説 "Sexy" が収録され続け、彼女の作品に関する初の研究書 *Naming Jhumpa Lahiri* (2012) も出版された。

Lahiri が描くのは、中産階級に属し生活に苦労はせずとも、アメリカとインドのどちらにも根を下ろすことのできない葛藤を抱くインド系アメリカ人の姿である。先行研究は彼女の作品に見られるインド系ディアスポラ問題を、Homi K. Bhabha や Gayatri Chakravorty Spivak と言った優れたインド系知識人によるポストコロニアル理論を取り入れ、環大西洋的・環太平洋的視点から考察している。

本博士号請求論文は、上記のポストコロニアル理論や環大西洋・環太平洋研究を踏まえつつ、Lahiri 作品に頻出する "nowhere" や "nothing" など不在と現前の両価性を示唆する言葉に着目する。その上で、存在論的二律背反を示唆する「虚無の空間 (nowhere space)」で宙吊り状態となったインド系ディアスポラが持つ新たな地平へと向けられる眼差しを明らかにする。

序章では、*Interpreter of Maladies* 収録の短編、“The Third and the Final Continent” に触れながら、新たな土地への渇望こそがアメリカン・スピリットの根源にあることを論ずる。

第一章は Lahiri の初の長編小説 *The Namesake* (2003) について考察する。作品は 1965 年の移民法後にアメリカのマサチューセッツ州へ渡ったインド系移民の一家を中心に展開する。主人公は 1968 年に生まれ、ロシアの作家 Nikolai Gogol にちなんで名づけられた Gogol Ganguli であり、その名前によってアメリカ社会に馴染むことのできない葛藤が描かれている。Lahiri 自身が 1967 年生まれであることを考えれば、Gogol は彼女自身の人生をほぼ映し出したものであると考えられるだろう。しかしながら、本章では 1.5 世代という世代の狭間にある Lahiri による第二世代のみならず第一世代にも向けられた眼差しに着目し、主人公だけでなく、彼の親である Ashoke と Ashima もまた根無し草となった苦しみを抱いていることを指摘する。存在論的な曖昧さに着目することで、リアリズム作家として評されることの多い Lahiri の新たな側面にも光をあてることを目指す。

さらには、作中に言及され、父 Ashoke に大きな影響を与えた Nikolai Gogol の “The Overcoat” (1842) の重要性についても論ずる。若き日の Ashoke に多大な影響を与えたこのロシア文学の古典作品は、現前と不在、あるいは現実と非現実の境界の曖昧性を示唆する作品として、*The Namesake* の骨子であると言ってよい。

さらに、Lahiri が作中で言及しながらも、その重要性が十分に議論されていないのが 1960 年代の大衆音楽である。十代の Gogol Ganguli が熱心に聴く The Beatles を始め、 Rolling Stones や Bob Dylan や Eric Clapton らのロック音楽は、当時のインドを巡る社会状況を暗に伝えるだけでなく、インドとアメリカの環太平洋的な文化伝達を考察する上で示唆に富む。

第二章では、Lahiri の短編集第二作 *Unaccustomed Earth* (2008) のうち、後半部分をなす中編小説 “Hema and Kaushik” を取り上げる。Lahiri は Nathaniel Hawthorne によるアメリカ文学の古典、*The Scarlet Letter* (1850) の序文“The Custom- House” から引用しており、タイトルである *Unaccustomed Earth* もその一節によるものである。Lahiri の Hawthorne への意識に注目した先行研究は、この引用を、アメリカ文学の伝統の中に自身を組み込む試みの表れであるとしている。しかしながら、これらの先行研究が *The Scarlet Letter* の感傷主義的側面が Lahiri の作品に及ぼした影響について十分に吟味しているとは考え難い。本章では幼馴染であり後に恋人となる Hema と Kaushik の関係に Hawthorne を含む 19 世紀感傷小説の伝統が見出されることを明らかにする。

もっとも、Lahiri は単に 21 世紀版の感傷小説を生み出したのでない。ここでも物語を読み込む鍵となるのは彼女が言及する 1960 年代の大衆音楽である。物語の序盤で触れられる The Rolling Stones の *Let It Bleed* (1969) は、作中におけるシンパシーや溢れ出す感傷の客観的相関物としての自然災害を示唆する意味において、きわめて重要である。さらに、Jimi Hendrix への言及は、個人の感情とアメリカのインド系移民の人種的アイデンティティの橋渡しをする点で、見逃すことができない。なぜなら、Hendrix は黒人ミュージシャンであるとされながら、実際にはネイティヴ・アメリカンなど多様な人種的背景を持ち、黒人と白人という二項対立的な人種的枠組みの中で翻弄されていたからである。それは、白人優位のアメリカ社会において、白人に近いモデル・マイノリティとして認知さ

れながら、白人にも黒人にも帰属意識を感じられることのないインド系移民の姿と重なる。このとき、“Hema and Kaushik” は個人の感情をめぐる感傷小説としてだけではなく、白人と黒人の間に宙吊りとなったインド系移民の人種的アイデンティティを表象する物語であるのが判明する。

第三章は、Lahiri の二作目の長編 *The Lowland* (2013) を分析する。*Unaccustomed Earth* で垣間見られる *The Scarlet Letter* からの影響は、本作にこそ深く刻み込まれている。本章ではインド系アメリカ人作家としていち早く Hawthorne への意識を表明した Mukherjee の *The Holder of the World* (1993)をインド系アメリカ人作家の手による *The Scarlet Letter* の再解釈として触れた上で、Lahiri の *The Lowland* もまた、その伝統の上に立つことを論ずる。注目すべきは、*The Scarlet Letter* が内包する二律背反である。序論である“The Custom-House” では絶え間ない移動こそが反映の礎となることを説きながら、本編では Hester の帰還が示唆するように定住に比重が置かれている。そして移動と定住の二律背反を体現しているのが、*The Lowland* の Gauri である。物語は、カルカッタで生まれ育った Subhash と Udayan の兄弟を主人公として展開する。本章では夫の Udayan が亡くなった後に、彼の兄である Subhash と再婚し、アメリカへ渡った Gauri を中心に作品を読み解く。彼女はカルカッタからアメリカ東海岸のロードアイランド州、そして西海岸のカリフォルニア州まで移動する。Gauri の移動を注意深く考察することで、roots か routes の選択ではなく、それらを同時に抱え込むインド系移民の在り方を分析する。

第四章は、Lahiri のエッセイ集 *In Other Words* について論じる。*The Lowland* を書き上げた Lahiri は、ローマへ移住した。本作品は、Lahiri が初めてイタリア語で執筆したものであり、英語の対訳になっていることが興味深い。彼女のイタリアへの関心は、彼女が学生時代にルネッサンス研究に従事していたことだけでなく、自身の作品内で繰り返しイタリアへ言及していることからもうかがえる。*In Other Words* について Lahiri は「言語的自伝」という言葉で表現しているが、本章ではこれを、彼女自身を主人公とした創作作品として読み込む。その結果、Lahiri は、Benjamin Franklin 以来のアメリカ文学の自伝における自己の在り方をずらしてみせる。すなわち、*In Other Words* は疑似自伝として読むことができるのである。本作品中には二つの短編小説が含まれているが、作品の登場人物と作者である Lahiri の境界が徐々に曖昧になっていく。そして、彼女が自身の起源であり宿命であると述べるのが現前と不在の二律背反を示唆する虚無なのである。

結語では、2018 年に『ニューヨーカー』誌に掲載された “The Boundary” に触れる。この作品はイタリア語で書かれ、Lahiri 自身の手により翻訳されたものである。Lahiri が自身で英語に翻訳したことは、原語であるイタリア語にはまだ完全には熟達していないことに鑑みるなら、長く作家的威信の拠り所であった英語に、彼女の現前と不在の両価性を刷り込む野心的な試みであると言える。

同作品では名もない土地で暮らす移民一家が描かれるが、「虚無の空間」への回帰が語られる。一方、従来の Lahiri 作品同様、留まることのない移動性が示唆される。それは、「虚無の空間」さえも打ち破ろうとする脱領域的な Lahiri 文学の展開を予示する。

審査の要旨

志賀君の博士号請求論文はインド系アメリカ作家ジュンパ・ラヒリの主要作品におけるエスニックでも、アメリカ同化主義でもない――「どこでもない」――場所を自我の投影としてみるインド系の登場人物の視点を分析し、「移民作家」であるラヒリがインドとアメリカの文化をどのように融合させるか、あるいはその融合の場からいかに距離を置くか、またその際に作品内に見られる登場人物の情動がいかに作用するかなどを辿った野心的な研究である。執筆者は、作品内に見られる彼女の inbetween-ness や void といったある種寄る辺ない感覚について、テクストを精読することによって着実に議論を積み上げていく。出身国と移住先の国の二者選択ではなく、あくまで経由地（第三の地）を考慮にいれつつ、いかに彼女が従来の白人中心的なアメリカ文学史・文化史を書き換えていったかを解明しようとする点や、その際ナサニエル・ホーソーンという正典作家を始めザ・ビートルズやローリング・ストーンズ、ジミ・ヘンドリックスなど英米のポピュラー音楽を補助線とした議論へと発展させている点は、本論文のオリジナリティの核心である。最終的にはイタリア語という第三の言語（大人になってから意識的に習得した言語）の獲得によって、作家ラヒリが自分を語る言語を獲得し、「不完全な言語」を敢えて使うことの意義を論じているところも興味深い。様々な民族的区分によって構成されるアジア系アメリカ文学において、あえてインド系を選択するというその姿勢には、エドワード・サイードからガヤトリ・スピヴァクに及ぶポストコロニアル理論に精通し、さらにそこから発展した理論を作り上げようとする筆者の挑戦的姿勢がうかがえる。作家、テーマ、そして方法論ともに極めて建設的であり、先行研究の調査も申し分ない。

以上の前提を共通了解として、審査委員会は 2020 年 1 月 15 日に北館第二会議室において公開口頭試問を行った。

志賀君の出発点は、1 9 50 年代から公民権運動の 60 年代において、アメリカにおける多様なエスニック集団がアメリカの（白人）社会と移民に対する政策に対しプロテストするというスタイルを取り、アジア系アメリカ文学であるインド系アメリカ文学もその潮流に巻き込まれていったこと、にも関わらずラヒリの紡ぎだすナラティヴはそうしたプロテストの姿勢から逸脱したキャラクターを創出していることにある。してみると志賀君の「どこでもない場所の真っただ中」とは、アメリカにおいてプロテストか同化かという二項対立的な政治から逸脱した姿勢を示唆するだろう。しかし審査員団の中にはこの鍵概念「どこでもない」場所は、固定されてはおらず次第に変化していくインド系の主体的位置をも意味しているように見えるものの、アジア系アメリカ文学研究という領域からさえ逸脱しているラヒリのディアスポラ概念との関連が今ひとつ吟味されていないのではないかと断ずる向きもあった。それは志賀君とは方法論的立場が近いアジア系アメリカ研究の理論家 Kandace Chuh の *imagine otherwise: Asian American Critique*（2002）を参考にすれば補うことができたであろう。志賀君はサイードからスピヴァクに至るポストコロニアリズム理論の古典のことは熟知しているが、後続世代の俊英スー・ J・キムやジェニファー・ホーらにも注意を払うべきであった。

第 2 章においては、中編小説 “Hema and Kaushik”を精読しながら、その大団円に登場する 2004 年のスマトラ島沖大地震（インド洋大津波）を 2005 年にニューオリンズを襲ったハリケーン・カトリーナに結びつけ「グローバル・サウスがアメリカン・サウスを洗い流した瞬間」と見たのは鋭利な洞察だが、これをさらにスピヴァク的な惑星思考（planetarity）やエコ・クリティシズムにも発展させれば、現代文学としての意義を一層深めることができたかもしれない。

最終章 4 章において、イタリア語がラヒリにとっては「どこでもない」場所であるという解釈は大変興味深い。ベンガル語でも英語でもなく自分の民族の背景とは全く異なる言語を選択し、さらにそれを不完全に使用することによって生まれるナラティヴとは、ポストコロニアル理論におけるエスニック作家の<英語＞といった考えではないものをラヒリが希求していることが明らかであるからだ。志賀君が言わんとしているのはインド系“Indianness”をサバルタンであったり、アメリカに同化するモデルマイノリティーではないものに脱人種化する時に有用な手段としてイタリア語を選んでいるということであろう。そしてアメリカ・エスニック作家にとって、このような第三の言語が「どこでもないところ」として必要であるという結論には一定の説得力がある。

もちろん問題点がないわけではない。志賀君はラヒリの第一長編 *The Namesake* を分析するのにフロイトの「不気味なるもの」（the uncanny / unheimlich）の概念を導入しているが、同作品の主人公はロシア作家のニコライ・ゴーゴリの名前を継承しており、しかもゴーゴリの代表作「外套」（1842 年）はまさに不気味なる物語であるにも関わらず、その比較研究を一切省略してしまっていることだ。加えて、ラヒリを移民作家として定義しているものの、ラヒリが女性作家であるという点を全体として全く掘り下げていないのも問題であろう。というのも、第二長編 *The Lowland* で東海岸のロードアイランド州にいるガウリが子供と夫を残して西海岸のカリフォルニア州に行くという場面は、ホーソーンよりもむしろ、世紀転換期に活躍した女性作家シャーロット・パーキンス・ギルマンを彷彿とさせるからである。ギルマンはロードアイランド・デザイン大学で学び、結婚後は産まれた娘を夫に託し、カリフォルニアに赴いた経験を持つ上に、 19 世紀女性作家ハリエット・ビーチャー・ストウの遠縁にあたる。アメリカ移民文学史のみならず女性文学史のコンテクストにラヒリを再定位できれば、本研究の学術的貢献度はさらに向上するはずだ。

最後に、本論文は英米文学専攻では例外的に 21 世紀現在、現存する作家を扱っているため、ジュンパ・ラヒリがすでにアメリカ文学史上の正典の位置を占めているとは言っても通常以上に厳密な審査基準を設けねばならず、アジア系アメリカ文学研究の専門家 2 名とともに、北米におけるポストモダン文学研究の最高権威ブライアン・マクヘイル教授に参加要請したが、彼はすでに本論文を英語圏で単行書としてゆうに出版可能な水準に達していると判断していたことを付記しておきたい。マクヘイル教授はその上で、本論文で前景を成す虚無や現前／不在、宙吊りといった抽象概念をむしろ後景にして、ラヒリが各作品で言及しているゴーゴリやホーソーン、ロック音楽などを前景に出したら一冊の本として統一感が出るであろうと、具体的な改稿案まで提示している。

以上の経緯を踏まえ、審査委員会は、本論文に散見される若干のケアレス・ミスを修正するという条件を課した上で、志賀俊介君の論文を博士（文学）の学位授与にふさわしいものと判断する。　　（2020 年 2 月 14 日）